

鎌刃城跡発掘調査概要報告書

— 米原町内中世城館跡詳細分布調査に伴う発掘調査 —



2001.3

米原町教育委員会

目 次

序 文	1
I. はじめに	2
II. 位置と歴史的環境	3
III. 検出された遺構	5
IV. 出土した遺物	14
V. 調査のまとめ	16
VI. あとがき	19

例 言

1. 本書は、平成10年度より実施している、米原町内中世城館跡詳細分布調査の概要報告であり、鎌刃城跡の平成10~12年に実施した発掘調査成果を収録したものである。
2. 本調査は、国庫補助事業として、国庫補助金・滋賀県補助金を受けて実施した。
3. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 米原町教育委員会 教育長 山岡輝彦（平成12年1月より）
力石四郎（平成11年12月まで）

調査事務局 米原町教育委員会 社会教育課 課長 本田正春

調査担当 " 課長補佐 中井 均

調査担当 " 主任技師 土井一行

調査補助員 早川圭、酒井康介、泉幸治、安藤圭祐

発掘作業員 番場の歴史を知り明日を考える会をはじめとする番場の方々

4. 調査にあたっては、米原町指定史跡鎌刃城跡調査整備委員会〔委員長 村田修三氏 委員 加藤理文氏、木戸雅寿氏、太田浩司氏、泉峰一氏、酒井進氏、泉良之氏、込山秀雄氏〕を組織し、指導、助言を得た。

5. 現地調査および遺物整理にあたって下記の方々に指導、助言を得た。
ここに記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

三浦正幸、高橋美久二、松田直則、山上雅弘、高田徹、高橋順之

6. 本書の編集・執筆は、中井が行った。なお、製図は早川が行い、遺物写真の撮影は寿福写房の寿福滋氏を煩わした。

7. 本書の内容は現時点のものであり、検出遺構・出土遺物の検討・整理は現在続行中であり、詳細分布調査が終了した段階で改めて報告書を刊行したい。

序 文

近江には約1,300ヶ所にのぼる中世城郭が分布しております。「近江を制する者は天下を制す」の言葉通り、この城跡の数は近江の重要性を端的に物語っているといえましょう。

わたくしたちのまち、米原町には現在約16ヶ所の中世城館跡が確認されています。当地は坂田郡の南端にあたっており、犬上郡と接しております。中世近江は江南の守護六角氏と江北の京極氏、後には浅井氏という二大勢力が覇を唱えており、坂田・犬上郡はまさに国境でありました。このため国境警備の城が山々に築かれました。

こうした山城に登り周囲を見まわしますと、街道を押さえ、村を望み、相手の城を監視するというように、なぜここに城が築かれたかがよくわかります。山城跡には建物こそ残されていませんが、曲輪や上塁、堀切りなどが見事に残されています。こうした山城跡は歴史を体感することのできる数少ない場所でもあります。

今回、米原町教育委員会では国・県の補助を受けて、町内に残されている中世城館跡について詳細分布調査を実施することとなりました。町内で最も残存状況の良好な鎌刃城跡についてはその範囲を確認するために発掘調査を実施いたしました。ここにその成果の概要を報告させていただきます。本書が中世山城を研究するうえで少しでもお役に立てれば甚大です。

最後になりましたが、調査の指導を賜りました村田修三先生をはじめ、炎天下の調査に協力を賜りました地元番場の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成13年3月25日

米原町教育委員会

教育長 山岡 輝彦



鎌刃城跡と伊吹山(左側の山が鎌刃城跡の主郭)

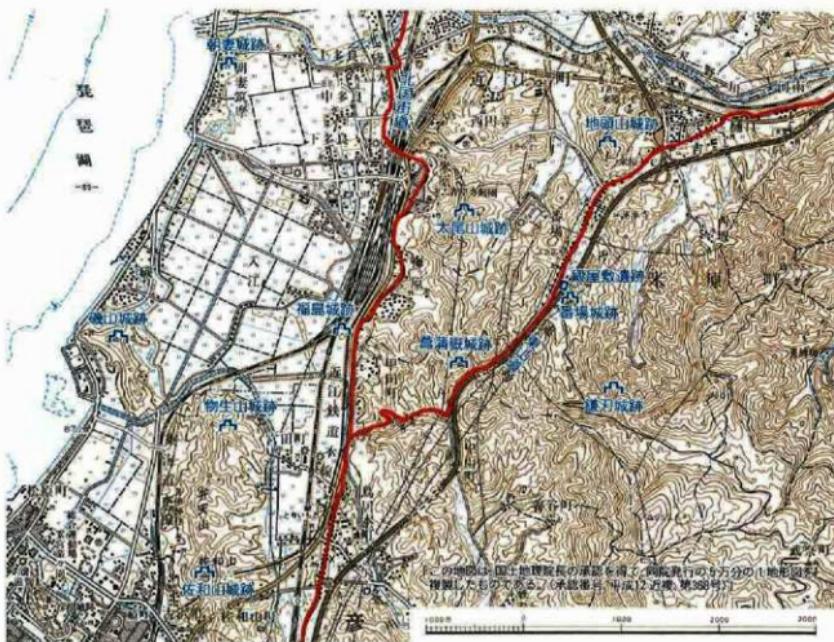
I. はじめに

米原町では、昭和60年度から昭和62年度の3ヶ年にわたって町内に所在する遺跡の詳細分布調査を実施している。その際に中世城館遺跡については16ヶ所を確認することができた。ちなみにこの分布調査では町内で88ヶ所にのぼる遺跡が確認されていることから、中世城館遺跡は町内遺跡の約20%を占めていることがわかる。

こうした中世城館遺跡は集落遺跡などと違い、現在でもその遺構が明確に地表面に残されており、その構造をおおよそ把握することができるとともに、現地で歴史が体感できる貴重な遺跡として郷土を知るための最良の歴史資料として位置付けができる。

そこで米原町教育委員会では平成10年度より8ヶ年の計画で、分布調査で所在が確認できた中世城館遺跡について詳細にその構造等について分析するために詳細分布調査を実施することとした。

分布調査を実施するにあたって、町内の中世城館遺跡のなかで最大の規模を持ち、残存状況も良好な米原町指定史跡鎌刃城跡の範囲を確認するために平成10~12年度にかけて発掘調査を実施し、多大な成果を収めることができた。こうした調査成果は戦国期の山城構造を検討するうえで貴重な資料となるものと考えられるため、本概要報告書を刊行することとした。



鎌羽城跡と周辺の城館跡位置図

II. 位置と歴史的環境

鎌刃城跡は米原町番場の集落から南東へ約1.25Km山中に入り込んだ、標高384mの山頂に位置している。北・東・西の三方は深い谷となり、唯一地続きとなる南方の尾根筋には7条にのぼる堀切が設けられている。この南方尾根は急峻で城名の通り、まさしく鎌の刃状にそそり立っている。

さて、鎌刃城の正確な築城年代は明らかではないが、城跡が位置する山稜は江南と江北の国境線であり、佐和山城、菖蒲城、太尾山城、磯山城などが点在し、連動して「境目の城」として応仁の乱ころには築城されたものと考えられる。

文明四年(1472)、応仁の乱で東軍細川勝元方であった江北の守護京極持清の家臣今井備中守秀遠に攻められ、鎌刃城主堀次郎左衛門尉らが討たれた。同十八年には多賀宗直方に属する鎌刃城主堀氏成が今井秀遠に攻められている。

天文二年(1533)には近江守護六角定頼が今井定清に命じて鎌刃城を攻めさせるが、六角氏による鎌刃城攻めはこの後、同四年、七年と続き、今井定清は堀氏に替えて老臣島秀安を城代として入れ置いた。その後、堀氏が六角方に降ると、再び堀氏が入城するが、永禄二年(1559)、浅井長政が六角承楨に抗すると堀氏も浅井氏に属するようになった。

元亀元年(1570)になると堀氏は一族の樋口氏とともに織田信長に内応する。このため浅井長政は同年五月に鎌刃城を攻め落とし、百々越前守を城代として入れ置いた。六月には姫川合戦に勝利した織田信長は再び堀氏を城主とした。翌二年五月には浅井長政と一向一揆軍が鎌刃城を攻めるが、横山城(長浜市)を守備していた木下藤吉郎の援軍によって救われている。

天正二年(1574)、堀・樋口氏は突然改易され、鎌刃城は織田信長西城の城となったよう、城内に備えられていた米穀二千俵が徳川家康に与えられている。以後記録には登場せず、まもなく廃城となつたものと考えられる。

城跡は東西約370m、南北約400mを測り、湖北地方においては浅井氏の居城小谷城に次ぐ規模である。主郭を中心に北方尾根上に7ヶ所、南方尾根上に副郭を含めて2ヶ所、さらに副郭より西へ派生する尾根上に8ヶ所の曲輪を設け、主郭と北端、南端の曲輪は周囲を石積みによって固めている。尾根の先端はすべてに堀切りが設けられているが、特に西尾根先端には近江では珍しい連続壁堀が設けられているなど、戦国時代後半の特徴が随所に認められる。

また、南方の尾根上には七重の堀切が存在することは前述した通りであるが、この尾根の南側谷筋を流れる青竜瀧には水手と伝えられる石橋も残されている。

さらに山麓周辺に目を向けると、鎌刃城跡の北尾根を下ったところに殿屋敷遺跡が所在している。その隣接地で平成3年度に発掘調査が実施され、14~15世紀の土師器皿や信楽焼の壺をはじめ貿易陶磁などが埴立柱建物跡や石組み井戸などの遺構から出土している。ここは承久の乱後に新軒地頭としてやってきた上肥氏とその一族郎党の屋敷地と考えられる。鎌刃城は從来この上肥氏の詰城として染かれていたと伝えられているが、立地が山麓の集落とあまりにもかけ離れており村落との結び付きは非常に希薄な城であったと考えられ上肥氏の城とはとても考えられない。

殿屋敷遺跡の背後に尖出した山頂には小規模な山城遺跡である番場城跡が位置しており、この城が殿屋敷と対になる詰城と考えられる。なお、番場の蓮華寺の梵鐘は弘安七年(1284)に番場の地頭であった土肥道日(元頼)が大増越となつて製作された鐘で、国の重要文化財に指定されている。

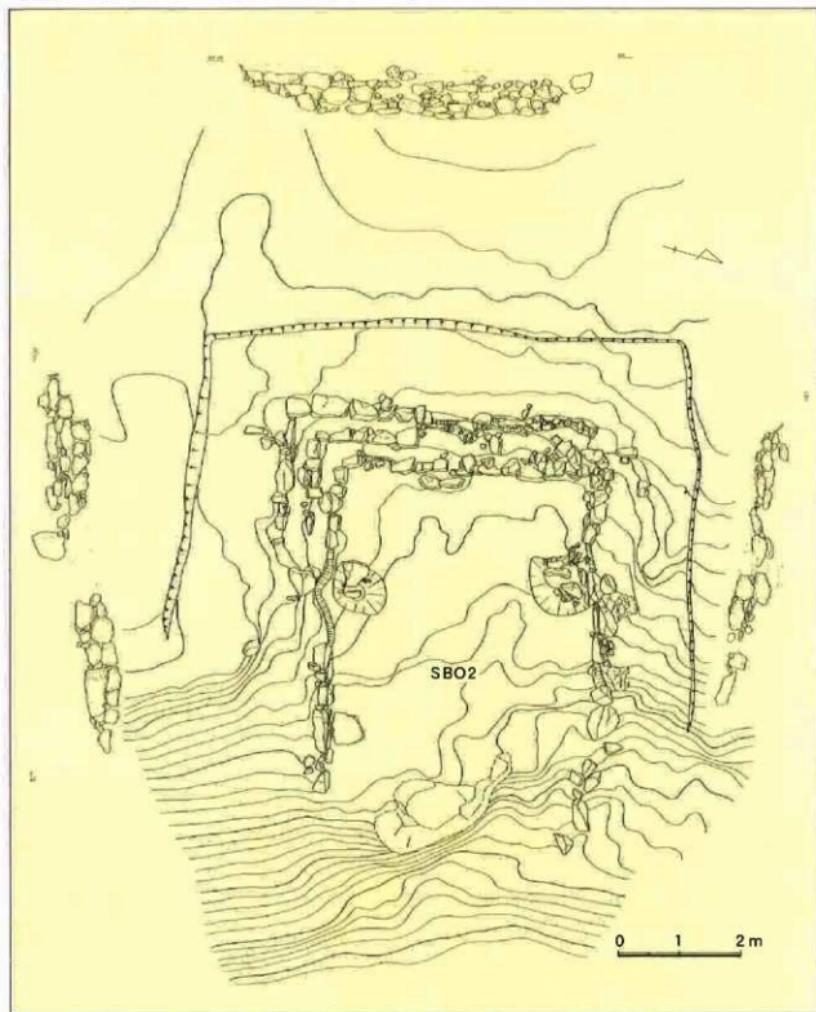


鎌刀城跡概略図

III. 検出された遺構

①平成10年度の調査成果

平成10年度の調査は北端の上翠囲いの曲輪(北-VI曲輪)と、その南側に隣接する一段高い曲輪(北-V曲輪)の東側に位置する虎口について実施した。



北-V曲輪で検出された虎口実測図



北-V曲輪で検出された折形虎口



北-VI曲輪で検出された礫石



北-VI曲輪内部から通路状遺構を見る



北-VI曲輪の通路状遺構



破城の状況(北-VI曲輪の通路状遺構)

北-VI曲輪の中央で東西にトレントを設定したが、このトレントで礎石を検出した。礎石は一間が六尺五寸というきわめて規則的であったため、礎石が掘えられている部分にサブトレントを設定したが、いずれのトレントからも礎石が検出され、北-VI曲輪には一間を六尺五寸(1.97m)とする五間(以上)×五間(以上)の総柱の礎石建物[SBO1]が建てられていたことが判明した。

なお、中央に設定した東西トレントではこの総柱建物跡の礎石より下層で柱間も合わない礎石を検出しておらず、少なくとも2時期にわたって礎石建物が建てられていたことも確認できた。

ところで、こうした礎石建物跡の検出面であるが、山城跡であるにもかかわらず1m近く埋没していた。これは自然に堆積したものではなく、人為的に一気に埋めたものと考えられ、陥城に伴って破城を受けた可能性が高い。

北-V曲輪の東側には調査以前から窪地があり、凹面に沿って石段らしき石列も認められ、ここが虎口の跡であることは以前より知られていた。調査の結果、東西6.4m、南北5.6mの枠形虎口が確認された。通常の枠形は正面の門を入れると左右のいずれかに折れて城内に入る構造となるが、この枠形は門を入れると正面に3段の石段があり、平入りの状態で城内に入ることができる。このため枠形の両側面は石積み(石垣)となる。石積みに用いられている石材はその大半が石灰岩であった。門[SBO2]については鏡柱の南側の礎石と両控え柱の根石が検出でき、間口二間(一間六尺五寸)の薬医門であったと考えられる。

なお、ここでも破城がおこなわれており、枠形内には多量に石積みに用いられたと思われる石材が投棄されていた。

②平成11年度の調査成果

平成11年度の調査は、10年度に検出された北-VI曲輪の礎石建物の全体像を確認することを主として実施した。調査の結果、北-VI曲輪の周間に巡る土塁は盛り土ではなく、地山を削り残して整形した上塁であることが確認できた。また、この土塁の東辺で、北-VI曲輪へ出入りするための通路が検出された。この通路は土塁を断ち割って開口しており、その幅は約四尺(1.3m)を測る。通路の両側は石積み(石垣)で構築されており、石積みの残存高は最高で約1.5mほどであったが、土塁の残存状況より築城当時には約3~4mもある高い石積みであったと考えられる。

また、通路の中央部からは6個の礎石が検出されたが[SBO3]、これは上部構造を支える柱の礎石か、あるいは通路内に設けられた門の柱礎石と考えられる。

こうした構造から、平成10年に検出された五間×五間の総柱建物の地下へ出入りする通路であることが明らかにできた。さらにこの建物の礎石は土塁直下で検出されており、雨落ちの余地が存在しないことから、土塁の上が一階部分となる建物が想定され、そうなると建物規模は南北九間×東西八間という巨大な建物となろう。北-VI曲輪は兵の駐屯場所としての曲輪といったものではなく、全体が建物の基礎部分であり、それは三重の堀切りの直上にそびえる重層の大きな櫓であったと考えられる。

戦国時代の櫓としては大規模な構造で、さらに穴蔵と呼ぶのに何ら違和感のない地下室の存在は、瓦こそ葺かれはしていないが、後の犬守とほぼ同様の構造と評価できる。

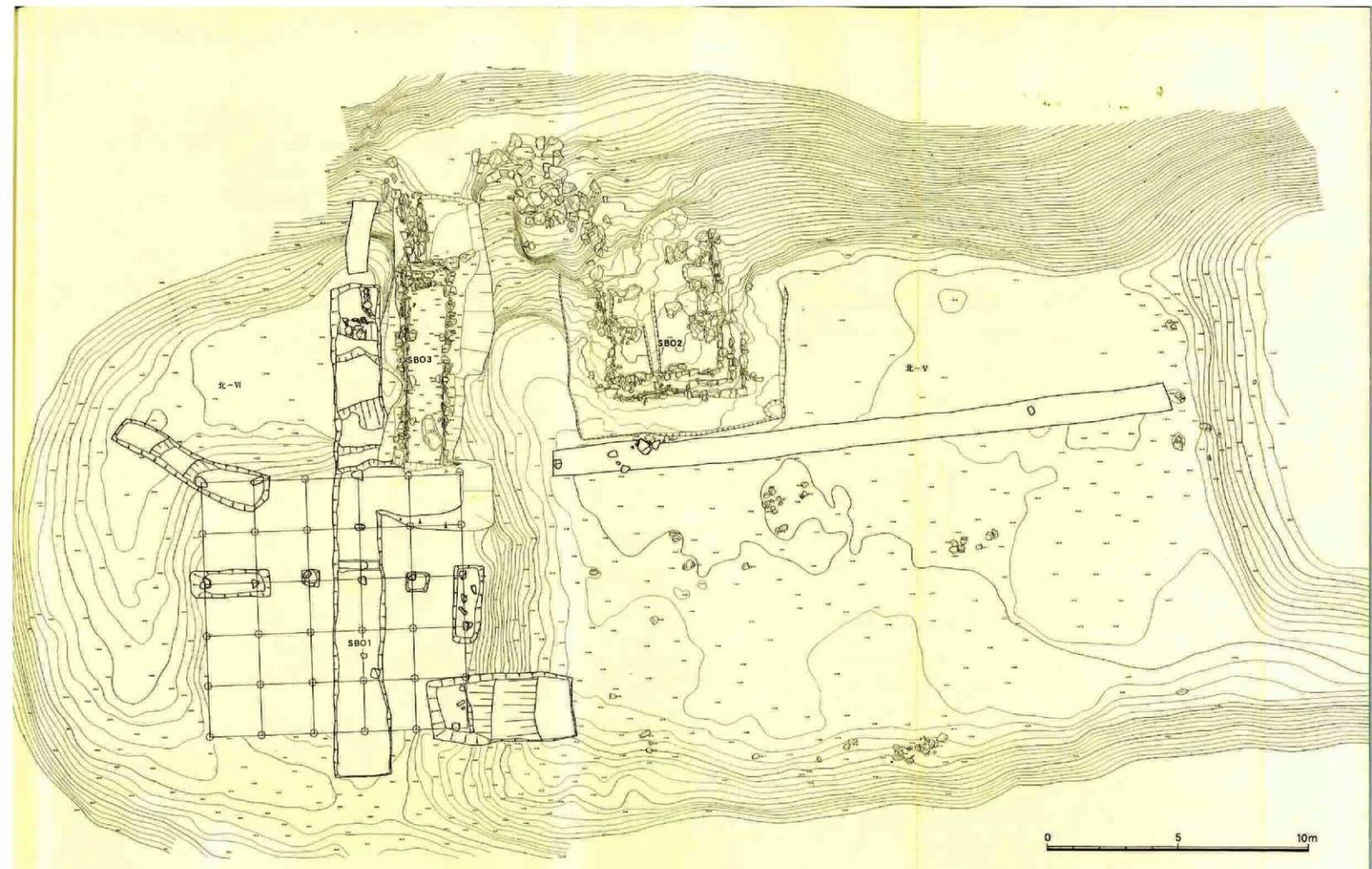
なお、通路の両側石積みは人為的に天端が崩され、通路は崩された石材によって埋められており、破城を受けたことがよくわかる。



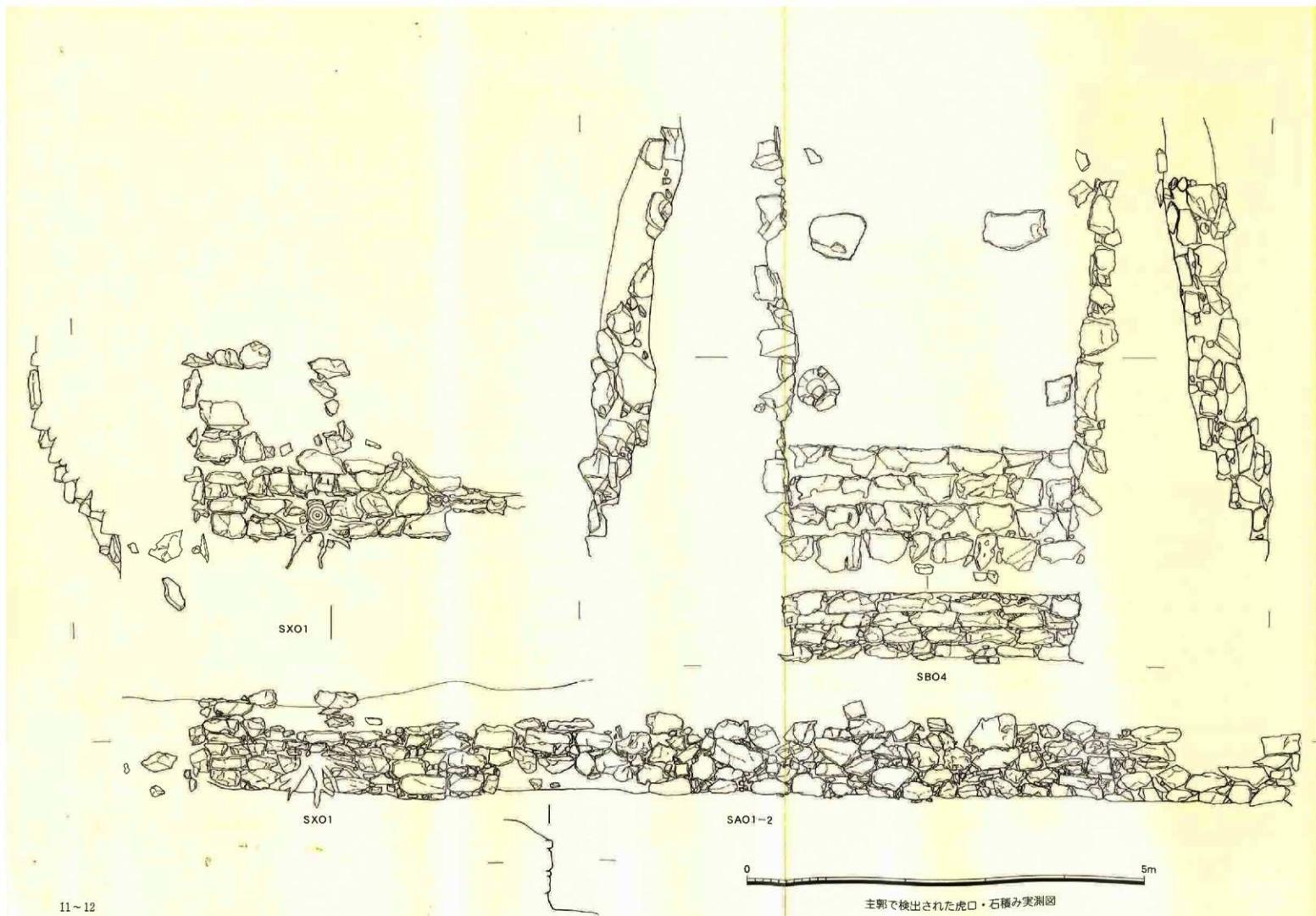
主郭南辺土壁の城内側で検出された石積み

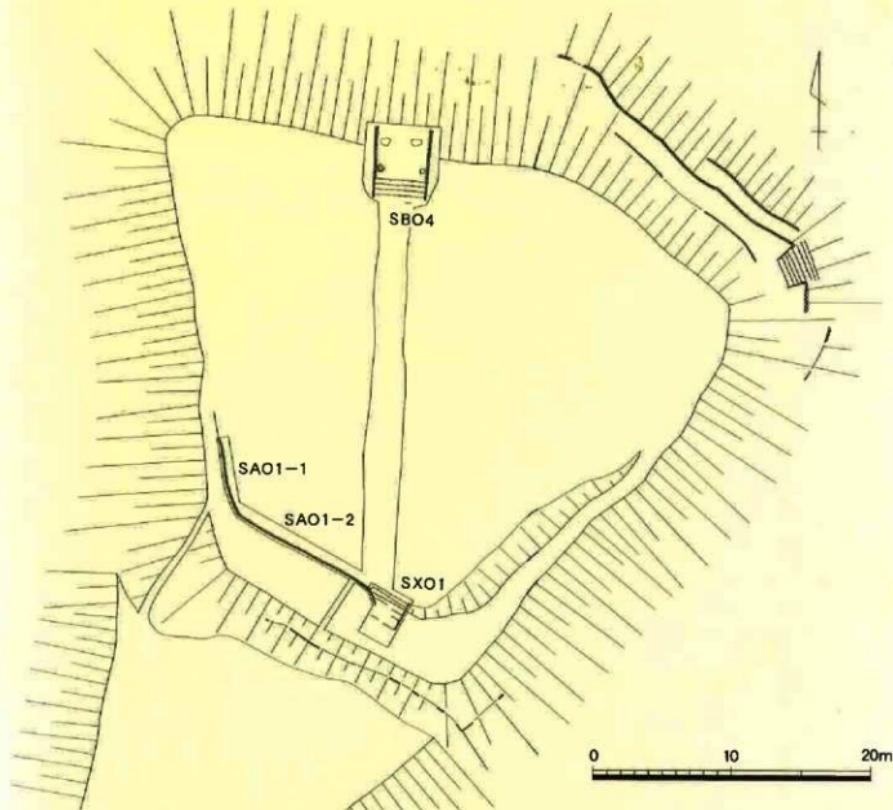


主郭南辺土壁の城内側で検出された石段(手前)と石積み

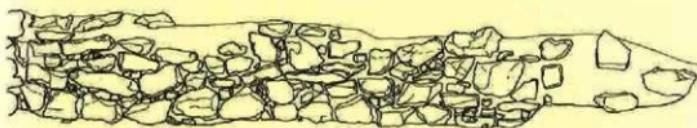


北-V・北-VI曲輪で検出されたSBO1・SBO2・SBO3実測図





主郭遺構検出状況 S=1/350



SAO1-1

③平成12年度の調査成果

平成12年度の調査は主郭、南端曲輪(南-II曲輪)、北-VI曲輪において実施した。

主郭の北辺部には北-V曲輪で検出された平入り形式の枠形虎口と同様の枠形虎口が検出された。規模は南北5.6m、東西4.0mを測り、北-VI曲輪の枠形虎口よりひとまわり小形である。虎口内部で検出された門[SBO4]では鏡柱と控え柱の四本柱の礎石が「ハ」の字状に4ヶ所で検出されている。礎石から門は一間の薬医門とみられる。

主郭の周囲は石積みとなるが、南辺については土塁が設けられている。この土塁は調査の結果、盛り土ではなく地山を削り残して整形した土塁であり、外面(南面)、内面(北面)ともに石積みであったことが判明した。内面で検出された石積みの残存高は1.2mで、4~5段の石を積んでおり、一部は幅2~3mの4段の石段[SXO1]となり、主郭より土塁の上に登れるようになっていた。土塁の幅は4.0m(2間)もあり、あるいは多間構が建っていた可能性が考えられる。

主郭内については中央に南北トレンチを設定したが、植林など後世の擾乱で明確な遺構は検出できなかった。ただ扁平な石材が散乱しており、これらは礎石であることはまちがいないが、残念ながらすべて移動しており、建物の規模等については不明である。

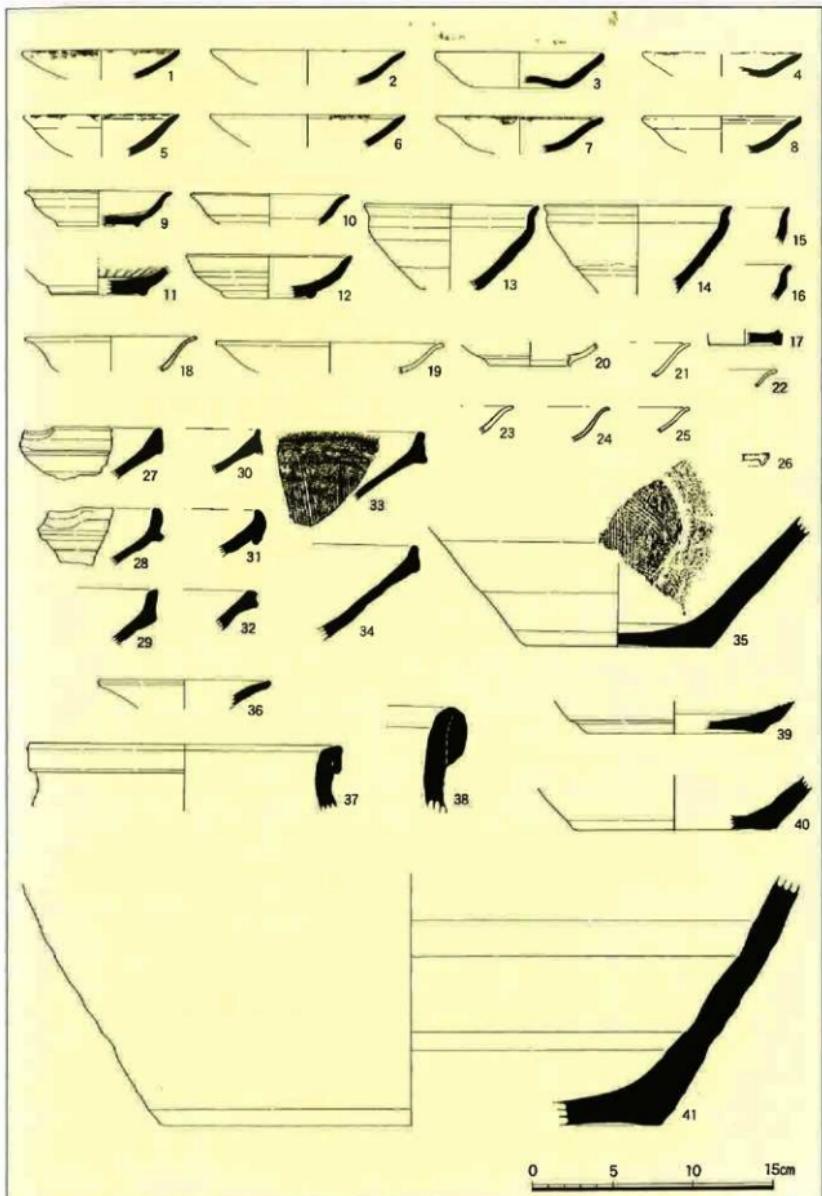
南-II曲輪は鎌刃城の南端に位置しており、南方防衛の最前線となる。このため南端には巨大な土塁が築かれ、その直下には巨大な堀切が設けられている。この曲輪も後世の植林によって遺構は検出できなかった。しかし、土塁に設けたトレンチで原位置を保つ礎石を検出することができ、北-VI曲輪のように土塁を壁面とした半地下式の重層建物が存在した可能性が考えられる。

なお、平成12年度は北-VI曲輪でサブトレンチを2ヶ所設定し、礎石をほぼ定位置で確認することができた。

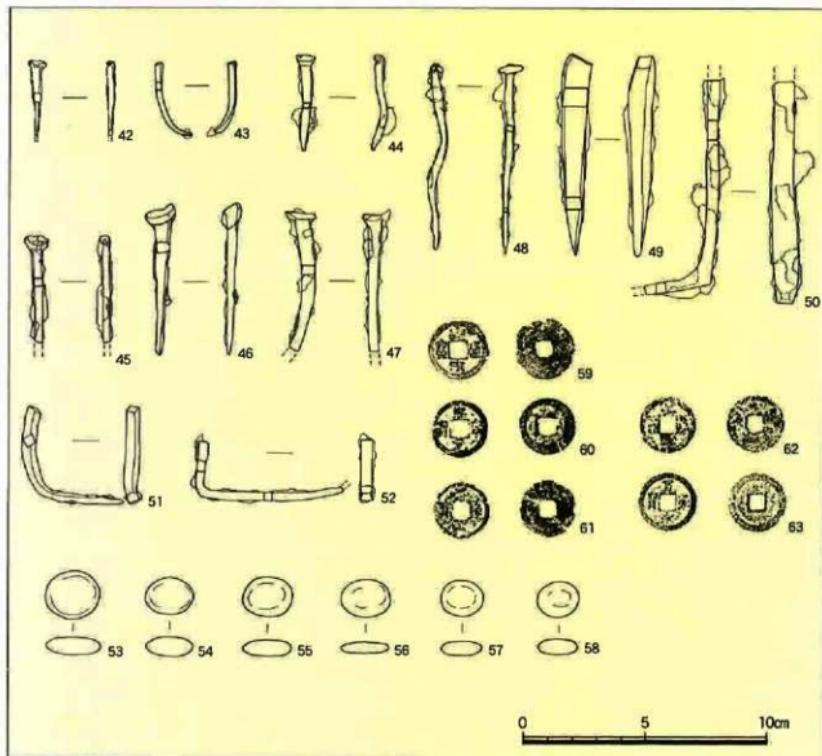
IV. 出土した遺物

1~8は手づくねの土師器の皿である。法量は口径10~12cm、器高1.5~3cmの小形の皿がほとんどを占めている。なお、口縁端部に煤痕の付着するものが多く灯明皿として用いられたものと考えられる。9~12は瀬戸美濃の灰釉の皿である。11は菊皿で内面に丸ノミによる鏽文を施しており、人窯II期の製品と考えられる。13~17は瀬戸美濃の鉄釉の大目茶碗である。瀬戸美濃の製品については大窯のII~III期のものと考えられ、16世紀第2~3四半期の製品と考えられる。18~26は貿易陶磁で白磁の端反り皿である。27~35は瀬戸美濃の擂鉢である。36は瀬戸美濃の鉄釉の壺の口縁である。37は瀬戸美濃製鉄釉の広口壺の口縁部で、38は備前の大甕の口縁部で頸部が直立し、口縁端部を折り曲げて玉縁をつくる。玉縁は丸味を帯びるが、わずかに稜線が認められる。他の陶磁器の年代よりは古い段階に位置付けられるもので15世紀末~16世紀初頭のものと考えられる。39は信楽の壺の底部である。40は瀬戸美濃の鉄釉の小壺の底部である。41は備前の大甕の底部である。

42~52は鉄製釘である。鎌刃城跡からは3ヶ年の調査で300点以上の鉄製釘が出上している。ここに掲載したものはごく一部にすぎない。42~44は長さ3cm~4cm(一寸~一寸五分)の小さなもので、床板材を打ち付ける釘と考えられる。最も出土量の多いタイプである。45~48は6cm~7.5cm(二寸~二寸五分)を測るタイプである。49はかなり厚手の釘である。50~52はL字状に折り曲げられた釘で鍵に相当するものである。



出土遺物実測図(土器・陶磁器)



出土遺物実測図(鉄製釘・銭貨・基石)

53～58は基石である。すべて黒石で、直径は1.7～2.2cm、厚さ0.5～0.8cmを測る。楕形はいびつで、正円になるものはない。ただ表面は非常に円滑に仕上げられている。

59～63は銭貨である。59は皇宋通宝、60は熙寧元宝といった北宋銭で、他は判読が不明であった。なお、63は寛永通宝で近世のものである。

この他、16世紀前半の貿易陶磁として青磁穂花皿や青磁碗が、国産陶器では信楽の茶入れなども出土している。また、山城からの出土としては珍しい漆器椀も出土している。木芯部分はすでに腐食して失なわれていたが、漆膜が残されていた。

なお、特殊な遺物として、海産の貝殻が出上している。食用あるいは儀式に用いられたものと考えられる。



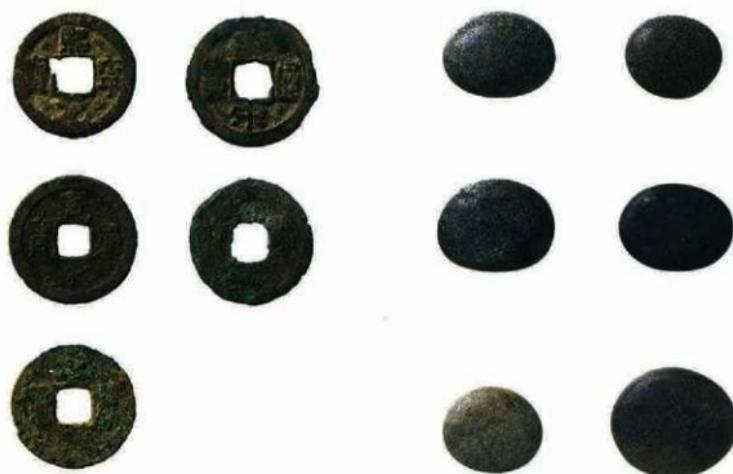
土師器(皿)・國產陶器(皿・天目茶碗)・貿易陶磁(白磁皿)



國產陶器(擂鉢・壺・甕)



鐵製釘



錢貨

基石

V. 調査のまとめ

平成10年度より3ヶ年にわたって実施した鎌刀城跡の発掘調査は予想以上に多くの成果を得ることことができた。

まず、北-VI曲輪では半地下式の九間×八間という大規模な総柱の礎石建物[SBO1]が検出された。三浦正幸氏によると地下室は後の天守にしか認められない穴蔵であり、重層の櫓で、大櫓と呼ぶにふさわしい建物であるという。

礎石の柱間は一間が六尺五寸であり、決して臨時の建物ではなく、番匠を動員して建てられたものであり、大量の鉄製釘の出土からも本格的な建築であったことは充分窺い知ることができる。

主郭、北-V曲輪で検出した枠形虎口は軍事的に折れ曲げて出入りをさせる枠形とは異なり、直進する半虎口構造となる。軍事よりもむしろ城内に入る門としての象徴性を持たせた枠形虎口として評価できよう。浅井氏の居城である小谷城跡の山土丸の虎口は発掘調査は実施されていないが、現在でも鎌刀城跡で検出された枠形虎口と同様の構造が認められ、戦国期の浅井氏の到達点としての虎口構造として注目される。

さらに戦国期の山城は文字通り、「土から成るもの」が大半であり、城郭に石垣が導入されるのは、天正四年(1576)の織田信長による安土築城からであるが、鎌刀城跡でも主郭、北-VI曲輪、南-II曲輪といった主要な曲輪の周囲は石積みが導入されていたことを明らかにすことができた。石積みの石材の大半は石灰岩を用いており、地山の粘板岩は一切用いられていない。

なお、本概報では石積みと呼称しているが、それは石積みの背面に栗石(裏込め石)が用いられていないことが確認できたため、石垣とは技術的に相違が認められるのであえて石垣とは呼称しなかった。しかし、切り岸面を右によって築くという機能は石垣と同じである。こうした石の導入も戦国期浅井氏の築城技術の到達点として位置付けできよう。

おそらくこうした最新の技術は土塹堀氏や櫛口氏が単独で築けるものではない。国境警備という重大な任務を負った鎌刀城に対して浅井氏が直接技術指導して築城したと考えられる。

廃城に伴って破城がおこなわれたことも注目される。文献のうえからは城割りの実態が明らかにされつつあるが、考古学的に実証された事例は熊本県の鷹ノ原城(南関新城)跡などきわめて少ない。さらに織田段階の破城となるとその実態をはじめて明らかにし得たのではないだろうか。石積みの天端は崩し、枠形などの虎口は右で埋めて使用不可能とし、曲輪も土で埋めており、徹底した破城の実態を知ることができた意義は大きい。

鎌刀城は在地支配の城ではなく、国境警備の境目の城であったことは集落から遠く離れているという立地や、検出された遺構からも裏付けられる。ところが出土遺物に目を向けると調理具、貯蔵具、供膳具が出土しており、山上で生活していたことも事実である。国境で軍事的緊張関係が高まると、警備の兵が駐屯し、こうした兵が用いた十器だったのであろう。出土した陶磁器は16世紀第2～3四半期に位置付けできるものであり、城の構造や文献史料の年代と一致する。石積み、枠形虎口などから絞り込むと検出された遺構の構築年代は堀氏が浅井氏に属した永禄二年(1559)から堀氏が織田信長に内応する元亀元年(1570)までの浅井氏の最前線として機能していた時期に限定できるのではないかだろうか。

VI. あとがき

鎌刃城跡の調査成果は戦国時代の山城を考えるうえで実に貴重な資料を提供してくれた。織田信長によって築かれた安土城によって石垣・瓦・礎石建物という3つの要素が城郭に出現した。これらの要素に織豊系城郭の画期を認めることができ、中世城郭から近世城郭への転換期となった。今回、鎌刃城跡の調査によって石積み、礎石建物が検出されたことによって戦国期の山城の到達点が明らかとなつた。石から成る城は信長の独創ではなかったのである。おそらく16世紀後半の全国的なうねりのなかで安土城も出現したのである。今後各地において戦国大名の築城技術の到達点が明らかにされることに期待したい。

こうした貴重な成果が得られたのも炎天下に地元の城跡の実像を少しでも明らかにしたいという番場の皆さんの熱意があったからこそである。今後は城跡を活用して、まちづくりに活かしていくことを望みたい。

城は軍事的防衛施設である。しかし、毎日が戦いの場所ではなかった。実は戦いのない日のほうが圧倒的に多かった。戦いの合間の平和な日々に天目茶碗で茶を飲みながら、囲碁に興じていた兵たちの姿もまた戦国期山城の実態であった。

平成13年3月25日印刷
平成13年3月31日発行

鎌刃城跡発掘調査概要報告書

—米原町内中世城跡詳細分布調査に伴う発掘調査—

編集 米原町教育委員会
発行 〒521-0016滋賀県坂田郡米原町下多良3-3
TEL. 0749(52) 6632
印刷 立木印刷
〒521-0035滋賀県坂田郡米原町醒井478-1
TEL. 0749(54) 2662

4600

KAMAHAC CASTLE

Report of Archaeological Researches of Cultural
Properties, Maihara-chō, Shiga Prefecture



2001

The Board of Education of Maihara-chō
Shiga Prefecture, JAPAN